

# 第18回ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

## 報告書資料 一般 - 96

学校名・団体名	広島市立鈴張小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	「学び合い」を中心とする授業の創造

### <活動・研究の意義および活動報告>

#### 1. 授業研究

##### ①佐藤雅彰先生をお迎えしての公開研究会

本校では、佐藤雅彰先生を講師にお迎えして12年目を迎える。本年度は6月と10月に自主公開研究会を実施した。3校時に1学級が研究授業を行い4校時に校長室で指導を仰いだ。午後から代表提案授業を公開し、佐藤先生や参観者の先生方からの指導・助言をいただいた。自主公開研究会には、市内外の小中学校から参観に来てくださり、同じ目標を持って研究する先生方と、「学び合い」について共に研修を深めることができた。2回の代表提案授業公開研究会の報告は、以下の通りである。

##### ◎6月13日（水） 3年 算数科「長さをはかろう」

「mやkmの単位の関係に気をつけて、きよりや道のりを調べよう。」というめあてで「1km=1000m」の理解を深める学習を行った。どの子も生き生きと授業に参加し、ペアやグループで協力しながら、楽しく問題解決に取り組んでいた。佐藤先生からも、「子どもたちが安心して、夢中になって学び合っていた。」「関わるのが苦手な子へ、教師が上手く入り『繋ぐ活動』ができていた。」等の、賞讃の言葉をいただいた。しかし、「共有課題とジャンプ課題の整合性」や「めあてとまとめ・ふり返りの質の高め方」などが、今後の課題として残った。

##### ◎10月22日（月） 5年 算数科「比べ方を考えよう（1）単位量あたりの大きさ」

本公開研究会には、いつも本校と同一日に佐藤雅彰先生を招聘し、同じ「学び合い」を中心とした授業改善に取り組んでおられる、島根県川本町教育委員会から、谷川教育長様、田中指導主事様が参加された。両先生方も「これまでの、鈴張小学校の研究の成果（特に、学び合いのある授業）を、しっかりと見せてもらいました。」「これからの、川本町の授業改善の参考にさせていただきます。」等の賞讃の言葉をいただいた。

本校では、授業前に「アピールタイム」として、授業者の「授業でのこだわり」「ジャンプの課題の設定」等を発表し、全員で検討している。本授業では「ジャンプの課題」の設定に全員で検討し、共通理解のもと授業提案に挑んだ。その成果は、授業中での子どもたちの「えー、分からない。」「こうしたら、いいじゃない。」などの学び合う場面が多くあった。やはり、ジャンプの課題の問題が、学び合いに大きく影響していることが実証できた。本授業の反省から、「先生方がいつも、ジャンプの課題で（何か、いい問題はないかな。）と悩んでいることを知り、各部長や校長先生と相談して、本助成金にて各学年用の問題集を購入した。

##### ②校内授業研究会

8名の教員が、1人1回授業を提供し、計8回（2回の公開研を含む）の授業研究を進めた。授業前にはアピールタイムを設けて授業プランを皆で検討することで、課題設定の仕方や発問の工夫など、多くの意見をもとにプランを立てて授業に臨んだ。また、授業後の協議会では、見取った子どもたちの姿をもとに、どこで子どもの学びが深まり、どこでつまづいたかを検証し、得たことを日々の自分の授業の中で生かしていった。また、12月には、広島市教育委員会指導第一課から西村智由紀主任指導主事

に、6年生の「順序よく整理して調べよう」の授業の指導を受けた。

上記の授業研究を、年度始めに各々「研究テーマ」を設定したうえで実施した。年度末にはテーマに基づいて自分の実践を振り返り、研究成果を研究紀要としてまとめ、構成員が変わっても継続して研究を行えるために資料として残していく。

## 2. 先進校視察およびセミナーへの参加

2名の教員が、2件の先進校の授業研究会や学びの共同体の公開研究会へ参加した。研修成果はレポートにまとめて他の教員へも広げ、情報を共有した。

## 3. 小中一貫教育への取り組み

本中学校区は、4小学校と1中学校で、いずれも小規模校である。中学校区でも、「学力向上推進事業—小・中連携教育研究会—」とし、研究テーマを「小中9年間を見通した一貫性のある教育実践に取り組み、主体的に学ぶ力を育てる。」として、実践している。11月には、5校合同の公開授業研究会も行っている。また、夏季休業中には、「ハートプロジェクトチーム（基礎学力向上推進部会・生徒指導部会・特別支援教育部会）」に分かれて、各チームごとにテーマを絞って、意見交流を行っている。

## 4. 次年度に繋ぐための工夫

学校現場での大きな課題は、「毎年、教員の異動があり、これまで積み上げてきた研修成果をどのように次年度に繋いでいくか。」である。そこで、昨年までの研修部長と「学び合わせるための作法 ～『一人も一人にしない』全員が分かる授業のために～」の『指導のポイント 14条』を作成した。しかし、ただ配布しただけでは、指導の共通意識の徹底が難しいと考え、校長先生が『『学び合いのある授業』で、大切にしていきたいこと』として、パワーポイントを作成し、4月に校内研修会を行い、「本校で、学び合いのある授業として大切にしていって欲しいこと。」として指導講話を行われた。そのことで、本年度本校に赴任された先生方も、学び合いのある授業実践におけるブレが少なくなったように思う。

## 5. 成果と今後の課題

○ これまで、「授業が変われば子どもは変わり、子どもが変われば、学校も変わる。」を基盤において、日々の生活の中で見えてくる課題を、授業を通して変えていこうと考え、「学び」を中心とした授業改善に取り組んで14年目になる。授業に対する教師の意識も徐々に変わり、児童の「学び合い」という活動に着目し、言葉の定義づけや児童の「学び合い」のプロセスに合わせた場の設定を中心に「つながり・学び合い・育ち合う」授業をもとめ、授業観察や協議会の方法を工夫することを通して授業改善を行ってきた。また、個人研究に基づく専門家としての教師の学び合いを大切に「自らの研究テーマに沿った自分らしい授業を行うこと」を目指し、教師一人ひとりが個人テーマを定め、自分のこだわりの授業実践を進めてきた。「こだわりの授業づくり」ここに「させられる研究」からの脱却の第一歩があると考ええる。専門家としての教師の学び合いを実践するために、特に授業公開後の協議会を大切に、私たち自らも学び・育ち合う関係作りを構築してきた。授業研究会は、授業の上手・下手を論じる場ではなく、子どもの学びを見つめ、保障していくための教師たちの協働の場と捉え、自分自身を、子どもを、授業を見つめ直し問い続けていきたいと思う。

● 本校の一番の課題は、児童数が少ないため、研究の成果が数値として表れにくいという点である。2～3名の子の通過率が低い結果だと、平均にしたときにどうしても、学級平均の結果が低くなる。昨年の6年生は通過率30%未満児童が0であったことから、「全国学力・学習状況調査」においても、国語AB算数ABとも県・全国の通過率を大きく上回り、これまでの研究の成果が現れてきていた。

しかし、本年度の6年生は、中学年での既習事項の積み上げが低く、高学年になっても学力がなかなか上がらない児童が数名いた。そのことが、学級全体の通過率の低さに大きく影響していた。このことから、「中学年時期の基礎学力を徹底して定着させること。」「低学力児童を増やさない。」「場面によったら個別指導を有効にする。」などの課題が見えてきた。

また、指導者によって「学び合いのある授業」のとらえ方にも差があることが見えてきた。昨年、作成した、「学び合わせるための作法 ～『一人も一人にしない』全員が分かる授業のために～」の『指導のポイント 14条』を、今一度、全教員に徹底させるために、更なる研修の必要性があるように感じた。

「すべての児童に学びを保障するために」に向けて、全教職員が一丸となって取り組んでいる。すぐに効果の表れる事柄ではないが、継続により、子どもたちは仲間とつながることを喜びとして学習に取り組めるようになってきている。さらに質の高い学びを子どもたちに経験させることを目指して、今後も研修を重ねていきたい。本助成金に対して、感謝と敬意を表したい。ありがとうございました。